



Title	ろう者のセルフ・アドボカシー：手話にまつわる人生の諸戦略
Author(s)	森, 壮也
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20, p. 20-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102042
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《特別講演録》

ろう者のセルフ・アドボカシー

— 手話にまつわる人生の諸戦略 —

森 壮也 (アジア経済研究所)

Self-Advocacy for the Deaf:

Various Strategies of Life Related to Sign Language

Soya Mori (Institute of Developing Economies)

本日のお話は4つの部分で構成されます。第1部では私のおいたち、第2部は職業生活、第3部は本日のテーマのセルフ・アドボカシーについて、第4部ではそれを言語戦略とどう結びつけるかというお話になります。よろしくお願いいたします。

1. おいたち

私が生まれたのは1962年です。東京都の人口が1000万人を超えた年です。また、日本のテレビ受信契約者も1000万人を超えた年です。今は時代が変わったと感じますね。ろう教育との関連では、萩原先生が筑波大附属聾学校の校長だった頃に私は生まれたわけです。栃木県立聾学校では同時法が1971年（開始年には諸説あるため、全日本ろう教育研究大会で栃木校による同法の発表があった年を公式に開始した年と判断して記している）に始まりました。京都府立聾学校では1962年に幼稚部が初めて独立しました。1968年にキュード法が始まっています。全国で初めて難聴学級が1959年に愛知県に設置されました。1966年に金山千代子氏が、「母と子の教室」を開設しました。こうしたことがあった頃に私は生まれたわけです。

1970年代は小学校の頃です。半通級制度で難聴学級と聴児の学級を行ったり来たりしていました。同じ学校の中です。国語や道德の時間は難聴学級で口話の発音の訓練等を行いました。聴児の学級にはFM補聴器がどんと置いてありましたが、あまり効果はありませんでした。そのFMの装置が契機となりいじめが起きました。「お前だけ特別扱いだ」等と激しく言われたのです。また、「つんぼ」と言われ、いろいろないじめにあいました。私は3人兄弟の長男です。妹が2人で皆同じ学校に通っていました。3人ともろう者です。やはり激しいいじめに苦しかった妹が「お兄ちゃん助けて」とやってきて私が相手に猛抗議する等兄弟で助け合うことがありました。中学校では100%聴者の集団に入りました。難聴学級もありませんでした。自宅近くの中学校でした。小学校は遠かったので通学が大変でした。中学校が自宅に近いのはよかったのですが、逆に幼なじみが誰もいなかったのです。他は地元の小学校から来た生徒たちなので私だけが違って苦しかったです。「発音が下手だ」等いろいろいじめられました。それで登校拒否になり、中1から中2の途中まで学校に行きませんでした。しかし、先生方もいろいろとはたらきかけてくださったので復帰しました。授業のノートを自分のために

作りました。例えば、英語の授業では教科書全文を書き写した上で辞書で調べて懸命に独習で全文翻訳をし、先生にノート提出すると真っ赤に添削されて戻ってきました。友達がそれを見て、日本語の訳文が載っているのが好都合だと「写させてくれ」となりました。友達の間でそのノートが回り、感謝される。自分のノートが価値をもつ貴重な体験をしました。それが1970年代頃でした。合格した都立高校ではろう者は私1人でした。保健委員に推されました。学校生活でしんどくなった時には保健室が癒しの場所になっていました。保健の先生にいろいろとサポートして頂きました。学校は自立を重んじ、生徒たちを子どもではなく大人として扱ってくれました。例えば、教師の一方的な話を書き写すのではなく生徒が自分たちで授業をするのです。先生は椅子に座ってその様子を見ているという珍しい伝統のある高校でした。高校では様々な面白い経験をしました。早稲田大学に合格した後は大変でした。最初の講義に出た時に教授が口で話すことは当然分らないので教科書を買って求めて教授の話と比較したのですが、教科書の内容と話していることが違うのです。友達にノートを見せてもらっても自分のためのノートですから、私が知りたいことはほぼ何も書いてありませんでした。このまま講義内容が分からず4年間過ごすのでは将来が真っ暗だと悩み苦しみました。それで、思い切って学生相談センターに行って筆談でいろいろ尋ねました。ろう学生にはサポートが必要だと訴えました。しかし、相談センターの職員は「ろう者の学生が相談に来たのは初めてで前例がない。点字の会があるので行ってみてください」と言ったのです。「いや、点字はろう者とは関係ないです」と言うと、「そう言われても他に情報ありません」と言われるばかりでした。やむなく点字会に行き筆談で相談していると、たまたま点字に加えて手話を学習している学生がいたのです。その学生に別の手話の勉強会があると誘われました。とても小さな集まりで様々なボランティア活動をしているサークルでしたが、1週間に1回、いえ2週間に1回ほどほんの少し手話の学習をしているだけでした。私が受ける講義の手話通訳やノートテイクにはその程度の手話知識では全く足りません。それで大学1年生の途中、公式には2年生から「手話さあくる」を設立しました。私は聴者の学生に手話を教えました。ノートテイク、手話通訳と3人位が私のサポートに入るという方法で学部の4年間、さらに大学院2年間、合わせて6年間その形で学びました。大学では様々な経験をしました。一つ重要だったのは、学部教務から「学生から集めている授業料は皆同額なので大学からのサービスも同じ。ろう者を特別扱いしない」と言われたことです。今ならあり得ない理屈です。しかし、以前は無自覚にそう話す人がいたわけです。「それは違う」と私も懸命に考えました。環境を自分のために作らなくてはいけない。手話サークルだけでなくノートテイクや手話通訳の制度を作っていくということです。「手話さあくる」は幸いなことにずっと続いています。早稲田大学では様々な障害学生への支援室がありますが、その発足時には「手話さあくる」のOBがスタッフとして入り支援が続きました。

2. 職業生活

大学院修了後、アジア経済研究所に就職しました。「マイナスからのスタート」で大学にいた頃は制度とまでは言えなくとも、とにかく手話通訳等のサポートがある状況を作りましたが、就職するとそれが全くなりゼロからのスタートでした。実際はゼロよりもっとマイナスに近い状態でした。

研究所でアジア工業化プロジェクトが立ち上がった時に研究のための人材が必要だと採用されました。ろう者、聴者にかかわらず、人が必要だと採用されたわけです。最初に出勤した時、デスクに

は電話機が置いてありました。当時、ミニファックスを自宅では使っていました。職場のデスクにはFAXはまだなく音声で話す電話機だったわけです。聴者と同じ環境ということなのでしょう。また、海外に行かなくてはいけない時にろう者で心配だから聴者が同伴するというルールが最初の1、2年がありました。ですが、徐々に変えようと、まず電話の問題については労働組合を通じて交渉した結果、FAXが置かれるようになり助かりました。たまたま、労働組合の委員長のお子さんが知的障害者ということで協力してくださいました。海外出張も初めは単独の出張は危険だ、心配だからと認められませんでした。3年目位の時にたまたま多忙で同伴できなかったため単独で出張に行ってもいいことになりました。しっかり調査をして必要な資料、データを自分で集めてきちんと報告したところ、「ひとりでも出張に行っても仕事ができる。それならば以降の出張は単独で行ってもいい」となりました。仕事で初めて手話通訳がついたのは、外部向けの講演会でした。例えばフィリピンでの自動車関係の調査に関連した講演には多くの聴者が聞きに来ます。その講師を務める際に手話通訳の必要性を理解してもらい、初めて手話通訳をつけて講演を行いました。その後の質疑応答でも手話通訳を使いこなすことができ、その講演は成功裡に終わりました。

次の問題です。海外での調査の際、本来は手話通訳が必要です。しかし、初めの頃は通訳がいませんでした。やむを得ず筆談をしていました。フィリピンの企業や政府を訪問、また、フィリピンにある日本の企業を訪問しても筆談をしていました。当初は驚かれました。「ろう者が来た。調査をしているのですか。すごいですね。珍しいですね」と言ってくれるわけです。「困ります。お帰りください」と言われなかったのは幸いでした。様々な苦労がありました。やはり手話通訳がいた方がよいと思っていました。海外調査の際、調査補助員という制度があります。通常ですと資料を集める等の補助をしてくれます。この制度で手話通訳を採用できるのではないかと提案しました。事務方、上司が協議してくれ転用が可能だとなりました。交渉によって既存の制度をうまく変えてきたわけです。調査補助員として手話通訳を採用することができました。上司や同僚、また事務方がサポートしてくれました。

「障害と開発」という研究テーマについてお話しします。簡単にまとめると、アジア等の途上国の障害者、それもろう者だけではなく、盲者、肢体不自由者、知的障害者、精神障害者等に関する研究を進めています。そこに至る契機をお話しします。以前、工業化プロジェクトの時には企業または政府関係者に面会してインタビューをすることが多かったのです。それが可能なのは月曜日から金曜日までです。土日は皆さんお休みですね。フィリピンに1ヶ月位滞在中、土、日曜日は何をしようかとなります。観光ができればいいのですが、その頃のフィリピンでは観光といってもたいしたことではできませんでした。仕方なく町に出てあちこち歩いていると手話で話しているグループを見かけました。ろう者が集まっていたのです。フィリピンへは1997、98年位から行き始めました。その頃、フィリピンは政権が崩壊していました。皆様ご存知でしょうか。マルコス政権が倒れ大統領はハワイに逃亡し、国内はカオスという状況でした。経済も政治もカオスでした。非常に大変な状況でした。その関係でろう者の当事者団体も崩壊していました。以前、良い活動をしていた団体があったのですが、なくなっていました。しかし、ろう者が集まるコミュニティはずっと続いていたわけです。私もそうした場所に通ううちに、最初はジェスチャーから始めて見様見真似で徐々にフィリピン手話を習得していきました。様々なところに案内してもらいました。貧しい人たちが住むスラムにもろう者がいました。逆に豪邸で暮らすろう者もいました。貧富差に関係なく聾学校の同窓生で集まっていたりと、ろ

う者同士の交流はあったのです。様々な場所に連れて行ってもらったおかげで聴者には知り得ないフィリピン社会を見ることができました。さらに、ろう者だけではなく盲者、肢体不自由者等一生懸命活動している障害者団体のリーダーにも会うことができ、紹介され、つながりました。その時に気づいたのです。フィリピンの障害者は経済的に余裕がある暮らしをしているわけではないが、何とか生活ができています。彼らは生計をどう維持しているのか、食料はどんな手段で調達しているのか、就業できているのか等の情報やデータがないことに気づいたのです。情報がなければ調査をしなくては。私が仕事として調べようと決意したわけです。それまでの工業化とつながるプロジェクトをやめて「障害と開発」というプロジェクトを始める覚悟を決めました。

「障害と開発」プロジェクトの結果のうちの一つをご紹介します。障害者家計の貧困の状況を調査しました。発展途上国は誰もが貧しくて大変だと言われていますが、実際のデータを見ると障害者がいる家計と障害者がいない家計を比較した貧困の分析はデータとして明確に提示されているものは意外とないことが分かりました。いつも調査をして分析をしているフィリピンですが、2種類、都市部と農村部の障害者家計を比較するために家計を訪問してインタビューをしてデータを収集しました。収集する際にろう者、盲者、肢体不自由者の当事者を調査員として雇い、彼らの支援者も含めたチームで担当の振り分け等、私が指揮をとりました。最初のマニラ首都圏の調査の時、マニラは東京同様非常に広いところですのでその中の4つの市を抽出しました。これはランダムに選んだわけではありません。専門家の助言を受けて統計的にバランスが取れる形で抽出したわけです。それぞれの市の家計でインタビューをしました。質問項目だけで全部で20ページほどありました。いろいろ分かったことがあります。マニラ首都圏では100%の障害者が貧しいわけではなく富裕層もあり格差が大きかったのです。さらに、障害者がいる家計の貧困率は障害者がいない家計の4倍というデータが得られました。これまでこのようなはっきりとしたデータは世界銀行にもどこにもなかったのもその価値が大いに認められ、様々な講演に招聘されました。マニラだけではなくフィリピンの北部と南部でも調査しました。例えば、古い文化、伝統の影響を強く受けている南部だとセブ島が観光地として有名ですが、北部に小さな漁業を生業としている村があります。そこと南部の都市を比較しました。場所によって学校の数が違ったり文化の影響がそれぞれだったりとはっきり表れました。論文は日本語と英文で今までに4冊発表しています。非常に貴重な結果だとニューヨーク国連本部で講演した他、タイのESCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会）の事務局がバンコクにあり、そこでの講演にも招聘されました。職場であるアジア経済研究所の公開講座でも話しました。大事なポイントについて手話通訳を同行して報告しましたが、例えばフィリピンの方にその結果報告が必要なわけですからフィリピン手話で講演しました。また、ニューヨーク国連本部ではアメリカ手話で講演しました。バンコクでは、日本から通訳を同行して日本手話で話しました。予算や通訳の同行条件に合わせて私が選択しました。後ほどお話ししますが、通訳者に事前に注意点を伝えておく等の段取りをつけていました。

3. セルフ・アドボカシー

私の経験、おいたちをお話ししてきました。その背景について大事なポイントを改めて考えました。たくさんキーワードがありますが、中でも最も重要なこととお話しします。それが「セルフ・アドボカシー」です。3つの重要なポイントがあります。自分のニーズをしっかりとつかんでいること、2番

目はそのために必要な支援は何なのかを知っていること、3番目はそのニーズを周りの人たちが納得できるように説明し、提案していくこと、この3つになります。ニーズは個人的なもの、集団的なものの2つに分けられます。集団とはろう者の集団です。集団で特に必要なものがあるし、個人としてのものもあります。基本的に大事なものは人権の問題という意味では、どちらも同じだということです。「支援してくれてありがとう。皆さん、支援してください」ではないのです。自分が主体性をもち、また、自己決定権をもってしっかり把握して調整していくのです。その上で、対峙、交渉をし、それに成功して進んでいきます。ニーズを解決していく方法はろう者にとってはやはり言語、手話通訳の問題です。通訳がいつ使えるのか、使い方はどうなのかを何も考えずに対応するではありません。「手話通訳を用意してくれたんだ。よかった。無料なんだ」ではなく自分に合った通訳なのか、日本語をベースとした手話なのか、日本手話の通訳なのか、学術的内容によりどちらの手話が合っているのかという問題があります。大学レベルでは、手指日本語がいいと考える人もいますが、今までの経験からすると真逆です。日本手話の技量がしっかりとあり、見て内容が理解できる通訳。また、自分もごく自然に日本手話で話せる通訳。通訳を自分の声としてスムーズに使う方法も身につけてはなりません。これらを考えることが大事だと経験者としてお伝えしておきたいと思います。こちらで「セルフ・アドボカシー」のベイトマンの定義を引きます。「個人またはグループが自らのニーズ利益を求めて自ら主張し、あるいは行動する過程」を「セルフ・アドボカシー」と言います。非常に大切なポイントは「自分のニーズ利益、それを主張する。それを叶えるために自ら行動する」です。個人またはグループの例として、労働組合、公営住宅借家人組合、公民権運動グループ、反人頭税同盟、解放の神学を奉じる聖職者、神父たちです。知的障害者、精神障害者のグループの例があります。障害関係では知的、精神障害者に先進的な例が多くあります。これらの人たちが目指す運動は、本人を尊重することです。本人のニーズは何かを考えた上での運動です。また大切なこととして法的問題と大衆的な行動を巻き込む、統合するという面が強くあります。また、グループとして運動する時には特に組織のうちに含まれることがあります。組織のメンバーが運動しているところにサポートをする人が集まってきます。様々な関係機関、専門家が集まってくる集団を作り、民主主義的な考え方に基づく組織作りを行い、将来的には必要なサービスがメインストリーム化して組織に吸収され、サービスを提供するグループに変わっていく可能性があります。アドボカシーの限界の問題もあります。その形態に関わり倫理面を考えなくてはなりません。その例はソーシャルワークに多いのです。ろう・難聴の当事者運動は基本的に進んでいますが、大きな組織であるが故に逆に個人の活動が抑えられている面があります。1点申し上げたいのは、私の場合には特に学術通訳が必要だということです。学術通訳というと一般の組織、他の言い方では公的派遣ではほぼ福祉、警察、司法、医療の4分野が中心ですね。その面では素晴らしいと思います。が、それ以外の通訳の場合には予算がないので派遣ができないことになります。通訳者もその4分野ではプロだけでも学術通訳の経験がない、学会の通訳の経験がない等の壁があるわけです。その解決方法は何かという問題があるのです。

4. セルフ・アドボカシーと言語戦略

先ほど「セルフ・アドボカシー」を簡単に提示しました。ろう者の場合、セルフ・アドボカシーと通訳の問題がどう結びつくのかを考えていくことになります。「ニーズや自分の利益」が鍵だとお話

しました。基本的にろう者は、相手が話したり講義した内容を理解したいわけです。もう1つ落としてはならない、必ず必要なことは、話を理解するだけではなく自分の意見を言う、質問をする、自論を述べる面を忘れてはいけません。話を理解した上で自分の意見も主張する双方向性がとても大切になります。そのための行動に通常、手話通訳が配置されます。字幕がいい方もいるでしょうが、字幕の場合、説明されたことを理解するにはよいですが、自分からは話せないことになります。聴者が聞いて分かる発音であれば音声で話すこともあるでしょうが、自分の発言権を保障するために最も大切なことは双方向性がきちんと担保されることです。そのためには手話通訳が必要だと思います。通訳の配置は簡単ではありません。通常、手話通訳はどこから派遣されるのでしょうか。考えなくてはなりません。全国各地の都道府県または市町村に公的通訳派遣制度があります。世界的にも日本は整備されている方だと思いますが、FAX やメールで依頼をすると通訳が派遣されます。では、大学の講義に公的派遣は可能ですか。また、自分の教養のためにセミナーに参加する際、公的派遣できますか。限界があると思います。自分の地元では断られたという話もよく聞きます。通訳派遣制度が普及しているからよしではありません。特に、税金を使っている以上予算が乏しく、その範囲内という公共的な判断から派遣されない、今年はもう予算がギリギリなので派遣は難しいという問題が多発しています。通訳が派遣されなくてもそれでいいのでしょうか。その先を考えなくてはなりません。次を考え、2点考えなくてはなりません。公的派遣以外の方法を考えなくてはなりません。「無料で派遣してくれてありがとう」と考えるだけで終わってしまっている方が多いですが、公的派遣でない場合には費用を払うことを考えなくてはなりません。セミナーなどの場合には主催者がいますので、その主催者と交渉して予算を確保してもらうことです。それには時間がかかります。「明日配置してほしい」とはできません。前もってセミナーの企画が立ち上がった段階から交渉を始めなくてはなりません。通訳も含めて参加したい、そのために通訳の予算の確保について相談をします。補助金があればそれを確保します。自費で負担するかもしれません。ケースによります。答えは1つではないのです。大変ですが、交渉を始めることです。次に、セミナーの内容を十分理解できる通訳でなくてはなりません。例えば、基本的に公的派遣の場合、福祉、警察、司法、医療等の通訳経験者はたくさんいます。それ以外の公的派遣ができないような分野では経験のある通訳者は非常に少ないわけです。経験者や自分で学習していて知識も蓄積途上だという通訳者を探さなくてはなりません。ろう者自身が通訳コーディネーターをするのです。通訳者とも交渉をするのです。それらを考え、必要な準備ができる力を身につけなくてはなりません。大変な課題を提示しましたが、これは必要なことだと申し上げたいです。セルフ・アドボカシーの考え方を基本とした上で、言語と通訳について大切な4点を提示します。

1点目、通訳は誰かが与えてくれるものではありません。企画・イベントの主催者、企画者に主体的に交渉することです。通訳者への謝金予算をどう確保するかという交渉です。予算を作る他にも大変です。予算項目を作ったり、探したり、どこから払えるのか提案をして交渉します。自分だけでなく相手側にも考えてもらいます。2点目は通訳を好き嫌い等で判断しないことです。通訳者のスキルを見て評価するのです。通訳者の足りないところをきちんとコメントできる力を身につけなくてはなりません。手話言語学の知識が必要です。それがなければ「良かった。すごく分かりやすい」だけで終わってしまいます。分かりやすいのはなぜか、また、分かりにくい理由は何なのか。主語がどう提示されているのか、動詞の使い方はどうなのか、単語は適切に選択されているのか等ポイント

があります。そのポイントを理解した上で通訳を評価できる力が必要です。3 点目です。公的派遣通訳だけで考えないことです。公的派遣の場合、予算が少ない中通訳者に平等に仕事を配分するシステムが基本にあると思うのです。日本では特にそうです。しかし、それは違います。スキルが高い場合には報酬が高くても構わないと思います。技術が未熟なら謝金が安くても仕方ありません。通訳を市場のメカニズムに結びつけることを考えなくてはなりません。皆が平等であることが目標ではなく差があることも必要だと考えます。4 点目です。当然ですが、自分が依頼する時には事前に通訳に資料を渡さなくてはなりません。資料を読んでもらうことです。大事なキーワードを手話でどう表現するのか前もって準備が必要です。特に国名等は忘れてしまった、間違っただけではなくきちんと表現できるように事前の準備が必要です。以前良い通訳者だと思ったのは、事前に資料を渡したらご自分でいろいろ調べてコメントが書かれて資料が真っ赤になっていた方でした。素晴らしいと思いました。こうした下調べをしておくことは良い通訳者としてのプロ意識からだと思います。通訳者とも互いに切磋琢磨し、育てることが大切です。通訳者のスキルを評価しなくてはならないと話しましたが、少し補足説明をします。まず、大切なこととして手話の語彙と日本語のラベルの問題があります。例えば、手話に「知る」または「分かる」という日本語のラベルがつけられます。「知る」か「分かる」のどちらなのかという問題が大事なのではなく、／知る／のラベルはあくまで日本手話につける名前です。日本語ラベルと日本手話の語が 1 対 1 で対応しているわけではありません。手話の使い方、音声日本語に翻訳する方法にはいろいろあります。また、逆に日本語を聞いた時にどの手話を選択するのがよいかという問題もあります。日本手話の文法に合う適切な表現でなくてはなりません。通訳を見て違和感があれば、ろう者は混乱するだけです。以前に見た例ですと、日本手話の中で難しい語、日本語ラベルをつけるのに難しい語があります。例えば、／なぜ (ぼ) ／という手話があります。ある通訳者は、ろう者がよく使っているからと多用していました。通常、ろう者はそこでは／なぜ (ぼ) ／は使わないというところでも多用していたのです。通訳者は、ろう者がよく使う語彙だからと取り入れて多用すればよいわけではありません。通訳者には、どういう文なら／なぜ (ぼ) ／が適切かについての知識も必要です。次に、語順、統語規則と言いますが、この順番に合わせて NMS (非手指動作) を組み合わせることが必要です。例えば、／私 名前 森 言う／「私は森です」は他に、／私 名前 何 森 言う／と言えます。公的な場所、例えばホールで、／私 名前 何 森 言う／と言うのは適切です。統語規則も合っています。また NMS も必要です。が、個人的に友達と 2 人で話している時に／私 名前 何 森 言う／と言うとおかしいことになります。その場に相応しい適切な文、正しい NMS を選ばなくてはなりません。次に主語が大切です。音声日本語の場合、主語を省略できる場合が多いのですが、日本手話では主語ははっきりと提示されなくてはなりません。省くことはできません。主語は文末の指差しで提示されます。／私 名前 何 森 言う - PT1 (／言う／と PT1 は連続している) ／、／森 言う (独立した語の形で) PT1 ／これは誤りですね。指差しは弱化化されていなくてはなりません。指差しがなくても可能ですが、その場合には NMS が必要になります。NMS は眉の上げ下げ、視線の上げ下げ、傾き等が主語の提示の際等で指差しの代わりに使われます。そういう文法のルールをきちんと身につけた上で主語を明示します。他は、ロールシフトまたは動詞についてです。ロールシフトには視線が大事で、その上に動詞の対応が必要です。主語が／私／の場合、明示しますね。主語が自分ではない場合にはロールシフトは適切ではありません。適切な形にして主語を取り入れます。主語、目的語により方向が変わる一致動詞を適切に使わなくてはなりません。

空間を使う動詞は主語に関わりません。主語が自分だけという時は目的語にかかわらず、例えば、／渡す／、／移す／、／引越す／等場所が変わるだけの動詞であればロールシフトを使う文は少ないのです。そこは要注意です。また、普通動詞は一致動詞のような方向とは無関係です。／好き／という手話の動詞。「あの人があの人を好き？」のように／好き／の後に指差しのようなものがつきます。この指差しのようなものは助動詞です。この助動詞もロールシフトと合わせて正しく使う必要があります。最後の例は音韻です。両手を使う手話の場合の接触する場所です。よく取り上げられる例は／秋田／という手話です。親指がどこまで動くのか、手のひら側まで行くと誤りです。手の甲であれば許容という範囲があります。そして韻律も正しくなければなりません。例えば、音声日本語の「オリンピック」には6つのリズムがあるのがすぐに分かりますね。日本手話ではどうでしょうか。大切なのはリズム(韻律)の数が音声日本語は6、日本手話は2または3に縮まります。同じではありません。日本手話と音声日本語のリズムは別なのです。これが重要なのは、見て自然に理解できる手話という問題と関連しているからです。日本手話のリズムに注意すると、見て分かりやすい、自然に頭の中に入ってくる手話ができることも通訳として大事なことです。そういう手話通訳を依頼する、探すことが必要です。懸命に取り組んできた結果、現在、職場では手話通訳に関して100%整備されています。会議、研修会、自分の発表、報告会、その他全てに通訳が整備されています。しかし、これで安泰というわけではありません。新型コロナです。新型コロナのためにこれまでの対面の会議に来ていた手話通訳が来られなくなりました。Zoomで通訳を行うと決まりました。すると今度は、Zoomでの手話通訳はどうするのかと今まで導入経験がないので必死に検索して、アメリカの方、様々な方から情報を集めた結果、Zoomでの手話通訳に必要な設定についても分かってきました。こうした試行錯誤でようやくやり方が分かってきました。手話通訳がつくようになって安心ではなく、そこでさらにプラスアルファが必要です。6、7人が集まっただけの会議でも研究会主催者としてZoomの通訳を依頼できることが分かりました。日本手話の通訳者がどこにいても依頼してZoom上に配置できることが分かりました。けれど、それで終わりではなく各地にいる通訳者に依頼できるので、研究会や講演は外国への通訳依頼も可能になったのです。例えば、イスラエルだったり、ブラジル、ドイツ在住の方に講師を依頼して、そこに通訳をつける等様々な方に研究会にご参加頂くことができました。アメリカ手話の通訳ができる方は日本に殆どいませんので、アメリカの通訳派遣会社にコーディネートを依頼して派遣してもらう。また、国際手話の場合にはやはり専門の派遣会社に依頼して通訳がつき研究会を開催することができました。職場の研究会はオンラインに変わりましたが、手話通訳についてはこうしてZoomで依頼することができました。でも、方法を習得したからそれで終わりではありません。まだまだです。なぜなら今年、コロナの収束はまだですが、状況が変わり会議や研究会を対面で開催するところが出てきました。ウィズコロナですね。でも、以前と同じ対面の方法にただ戻るのではなくハイブリッドという考え方で行っています。私自身は対面で参加しますが、通訳はそこにいない方に依頼するようにしています。そういう方法に変わってきているわけです。社会が変わり、それをきっかけに様々なことが起こりました。これからも何が起こるかは分からない状況です。

私からの話をこれで終わりにしたいと思います。最後までご視聴くださり、ありがとうございます。今回の機会を頂きましたMHB学会の皆様、また関係者の皆様にお礼を申し上げたいと思います。皆様、ありがとうございました。